

(3) 共同体そのものについて、著者が各地域において土地所有の問題を重要視し、記述していることは評価される点である。しかしおよそ農業共同体の存在するところ必ず相互扶助的な慣行（たとえばインドネシアのゴトン・ロヨン制のような）があり、それが各地域でどのように展開され、どのように変化してきたかについて十分にふれられていないのは残念である。

(4) 本書で扱われている地域の中にはなお多くの未解決の重要な問題も含まれている。たとえばマダガスカルへのマライ系民族の移住やその時期などについてである。これはなお多くの論争のあるところで、著者は簡単に「島の先住民はマライ系である」（一―三ページ）としているが、島の南部タラカイでの考古学的調査によってもマライ系民族の到着はアラブ・ベルシャ人などのそれよりずっとおくれたものようであり、先住民はコモロ諸島を飛び石として東アフリカからきたバンツ・スワヒリ系黒人という説が有力である。またこの新しい土地へ渡ってきたマライ系民族が郷土における共同体社会をここでどのように変形させたのか、いわゆるフォコロナとの関係はどうなのかについても詳しく知りたいものである。

またインカの社会制度でトラカを頂点とする官僚制については述べられているが、この制度の導入により形成されたとする「マルカ集団」（二―一ページ）とはあまり耳にしない名称である。伝統的にアイヌウの成員の中から選ばれた村長（マユカ）が共同体の指導者であったとされているが（泉靖一、インカ帝国）、それから出た名称でもあるのか、これも知りたいところである。

(5) 著者はもっぱらフランス側の文献にたよっているが、たとえば

共同体の現在における変貌の状況を明らかにするにはこのほか民族学や文化人類学におけるドイツ、イギリス、アメリカ側の現地調査の報告などをもっと利用する必要がある。それによって本書がやや歴史的過去に重点をおきすぎた点にも平衡が与えられることとなる。

(6) こまかい点になるが固有名詞の記述はやはり慣行のものに統一してほしい。たとえばマダガスカルの *Ilava* は「フォーバ」でなく「ホヴァ」に、インディオのとうもろこし *Quindia* は「チチア」でなく、「チッチャ」というふうに。

(7) ともあれ、本書は現在のいわゆる第三世界の住民の生活の研究にさいしてその原点ともいえる村落共同体の構造にメスをいれた点で啓蒙的な価値をもつものといえよう。（別技篤彦）

A5判、二五六頁、大明堂発行、昭和五二年五月、二〇〇〇円。

〔文献紹介〕

松原義継著 本阿彌輪中

別技篤彦氏の論文を先駆とする輪中研究は近年とみに活況を呈し、安藤万寿男氏・伊藤安男氏等の力作が次々と世に問われている。松原氏も多年この方面の研究を積まれていたが、その集大成としてまとめられたのが本書である。

通説を終えて本書には幾つかの特色があることに気づく。第一は研究それ自体の特色で、書名にもうかがえるように数多い輪中の中

でも一つの輪中に焦点をしぼり、龐大な佐野家文書の整理検討により、各種の問題を見出し、これが解明につとめられたことである。近年歴史地理学の分野も、研究方法も多種多彩になっているが、ナマの地方文書にじっくりと取りくみ、整理分類、解説、そして論を立てるというオーソドックスな手法にもとづく手堅い研究は意外に少ないようである。他の輪中研究者にあっては広く輪中地域全域を対象とし、焦点は現代の諸問題であり、その為に必要あれば歴史時代の史料にも当たってみるといった傾向が強い中において、松原氏の研究は独自の地位、学風をもつものといえよう。

第二にはじめて紹介される史料が多いということから繁をいわず、史料の原文を掲載引用していることで、後から研究する人にとって有難いことである。できれば史料目録や史料集の刊行がともなえばなお裨益する所が大きいであろう。ただしこれは労力的にも経費の面からも個人の力では無理で、研究グループの編成や地元自治体との連携が必要になろう。

第三は最後の結語の章で全体を手ざわよく要約されている事である。本論が前述のような記述方式がとられているので通読に骨が折れるのは事実であり、平素近世文書に親しんでない人の場合はなおさらである。結語の章を読むだけでも結果だけは知ることができる。全体を読み進んで結語の章に至った人の場合でもここで改めて今までに学んだ所をまとめることができる。

第四は近世を対象とする研究であるが、その後の変貌、そして現況にまで筆をのばしていることである。

第五、人口を扱った章（第一〇章）を読むと数字の上の分析にと

どまらず、なぜそうなっているかという点が明快に解明されていることが多い。多数の文書の中から直接人口研究に役立つ史料（宗門人別帳等）だけを取り出して整理するという方法でも得られない成果であり、佐野家文書の全部に目を通し、これにもとづいてなされた各方面の研究をふまえての研究なればこそである。一般に歴史地理の研究ではあるテーマにつき、広く各地を旅して関連史料を求め、比較検討するというのが主流のように見受けられる。広域研究の利点はもちろんなあるが、一面同一地域内の他の事項との関連が見失われがちになる。松原氏の著書を読み、歴史地理学の研究方法一般につき反省させられた次第である。

終に各章の題目を掲げ、紹介の筆を置く。

第一章序論、第二章本阿弥新田の開発と展望、第三章生産力の減退とその動向、第四章輪中の荒廃と基本的対応の問題、第五章高頂・本阿弥輪中の治水対策、第六章堀上田の開発、第七章堀上田と輪中農業の実体、第八章領主的土地制度の実体、第九章領主的土地制度に対する農民の対応、第一〇章本阿弥新田の戸口の増減、結論。

（中島 義一）

A5 刊 三三四頁 二宮書店刊 昭和五二年八月 四五〇（四）